

新 歌人群像

生方たつゑ

山国の厳しさの中で

沢口芙美



今井邦子との出会い

生方たつゑは、一九〇五（明治三十八）年二月二十三日、父間宮齋一、母きよの四女として三重県宇治山田市（現伊勢市）に生まれた。七か月の未熟児で、虚弱体質であったという。宇治山田高等女学校を終え、日本女子大学家政科に入学。家政科に飽きたらず、文学の講義をよく聴いたという。一九二六（大正十五）年三月、日本女子大学を卒業し、引き続き東京大学哲学科の聴講生となるが、十月、卒論の指導を受けた横山有策の媒酌によ

り、米国留学から帰国した生方誠と結婚、二十二歳であった。夫は、群馬県沼田町（現沼田市）の薬種商「かどふぢ」の長男で、しばらく沼田に住んで、いずれ東京に出るつもりであったが、家業の跡を継ぐことになり、結局、沼田に住みつく。伊勢の暖国に育ったたつゑにとっては、山国の冬の厳しい沼田で、舅姑、義妹義弟のいる旧家の嫁としての苦勞がはじまる。婚儀に送ってきた母は、「ここはあんたさんの墓場ですよ」とたつゑに言い含めたという。この言葉は、旧家の中で苦勞し、挫けそうになるたつゑの心を幾度となく支えた。



結婚後、間もなくのころ(1928年)

一九三〇(昭和五年)年、衆議院議員をしている叔父が沼田でたつ系に会い、このままでは「沼田の山猿になつてしまふ」と心配し、家の中で勉強できる短歌を奨め、歌人の今井邦子を紹介する。以後、毎月一回上京して邦子に作歌指導を受ける。短歌に特に興味があるわけではなく。ただ、旧家の生活の中で生き甲斐を求め、迷っていたたつ系にとつて、短歌を作るのは、その生活からひと時逃れて自分の世界を持つことであり、生活の中で生起する思いを吐き出すことであつた。一日の家事を終え、皆が寝静まつた夜、たつ系は作歌に没頭してゆく。

一九三五(昭和十)年、邦子の薦めで第一歌集『山花集』を上梓。一九四四(昭和十九)年、第二歌集『雪明』を上梓する。作歌開始五年

で歌集を持ち、毎月一回指導を受けに、戦争中も上京を一度も休まなかつたことに、たつ系の短歌に対する熱意が表れている。

壺のなかにみづの凍らむかすかなるけ
はひは夜半にひとりきくべし 〔雪明〕

夜中に壺の中で水が凍つてゆくかすかな音を捉える感覚の繊細さ、それほど冷えの厳しさを伝え、また、そんな真夜中にひとり起きて、作歌に励んでいるたつ系の姿を偲はせる歌である。

この第二歌集までは、師の邦子に教えられのまま、写生に準拠した歌で、後年の作風からすれば、おとなしい歌である。

脱皮の苦しみ、歌風の転換

一九四五(昭和二十)年八月、終戦の後、了解を得て今井邦子のもとを去り、翌年、伯父生方敏郎の紹介で「国民文学」主宰の松村英一に師事する。

たつ系の歌が変わりはじめ、脱皮の苦しみをかせているのは第四歌集『浅紅』(一九四七—五〇年春までの作品。一九五〇年刊)である。

しかばねのごとき生き相をうたがはぬ
因襲の中の幸もあやふし 〔浅紅〕

骨の鳴るごとき切なき明くれも妥協し
ゆかば安けからむか
逆髪が天にうつたへるごとし裸梢も
つれてたつ山の上
遡なるころにみづの鳴りそめて恋し
きものら目ざめあふころ

旧家の中の生活を、屍のような生き相といい、それが本当に幸福なのかと問うている。自分に刃を当てるような鋭く激しい問いかけであり、日々の切なさを「骨の鳴るごとき」という尖鋭な形容、裸梢の姿を髪逆立てて天に訴えているようななどという。これはたつ系の必死の訴えの形象化であろう。心中深く眠らせていたものの目覚めを自覚してゆく。単なる主婦の位置から身を起こし、自己の立場を客観化し、心中の想いを形象化しようとする作家魂が育ちはじめている。

この心理の変化は何に起因したのか。まず敗戦直後であつたこと。一九四六(昭和二十一年)年から四七年にかけて、俳句や短歌は第二芸術だという短歌否定論が沸騰する。この議論の中で、たつ系も、文学としての歌はどうあるべきか考えたに違いない。また、敗戦後、女性が参政権を得、女性の生き方も大きく変わる。「因襲の中の幸」という発想は、日頃去来した想

生方たつゑ

いであつたとしても、この社会の動きと無縁ではない。女性の生き方の変化、短歌の在り方への問い、人生と文学の二重の大きな変化にたつゑは揺さぶられる。一九四七年には女性の歌の興隆を目指した「女人短歌」が結成され、その発起人にたつゑも加わり、他の女流との交流が増えて、刺激を受ける。また、個人的には「もの書くを嫌った」姑しゅうごめが一九四八年に死ぬ。姑に遠慮して歌っていたたが籠もとれる。大小の変化に遭遇し、たつゑは歌人へ脱皮してゆく。

秀でたる黄いろの花もゆふべには知慧あるごとくみな合掌す
『雪の音譜』

結跣して心よらしむすがたさへたつ虹

のごととらへがたきか

なぎさにて白く噛み合ふ波のほか何が
 見ゆるといふことはなし
『靑粧』

幸はきれぎれにしてをはるともけふあ

こがれてゆく潮があり
『白い風の中で』

打算もちて歯切れよく言ふ若きこゑこ

の距離感もやがて憎まず

脱皮への苦悩は『雪の音譜』で成果を見せる。写実性のある歌から、より深く自己の心理に分け入る歌となり、硬質な言葉遣いと、物を見通すたのり伶俐な視線に、たつゑ独自の歌境を見せはじめる。この歌集で歌人生方たつゑ

は誕生したと言われる。

しかし、心理の表現は、形のないものを言葉に表現するので、どうしても抽象性を帯びる。「私の心が、渦まき、逆浪を立て、やがて濃みを湛たえるとしても」、第三者には解わかりがたいことで、たつゑの「骨をけずるような」生への切ない切りこみは、鋭さを増しながら難解にもなってくる。何ものかを希求する渴いた心の表現は、針金細工のような、と評されつつ、一九五七（昭和三十二年）の『白い風の中で』により第九回読売文学賞を受ける。

人間の業を見つめた 「火の系譜」

たつゑの歌業の頂点をなすのは次の歌集、一九六〇（昭和三十五年）年の『火の系譜』であろう。この歌集には能の「葵上（泥眼）」あおいのうゑ、「綾鼓（大悪尉）」あやのつづみ、「卒塔婆小町（老女）」を背景にした各三十五首の連作を収める。

呪咀にまでかはる劇しき愛もちてくさ
 りのごとき鎖骨がさむし
『泥眼』

紅絹裂けば紅絹のあやしきにはほひ充つ
 透きとほるまでの嫉妬をもてば

欺されて鼓を打ち果てき血の引きし
 瞋恚に欠けて犬歯さへ鳴る
『大悪尉』



「女人短歌」のメンバー。左から、阿部静枝、五島美代子、長沢美津、生方たつゑ（1956年）

氷の刃やいばに目を突かれ死ぬ凄惨も老いの
 失意のさまより軽し
 氷の炎さへ発あはけばあつし零莫のわたく
 しに憑く君の亡霊
『老女』

「泥眼」では、「男の愛に溶解しえなかつた彼女（六条御息所）の知性が、溶解しえなかつた女の不幸に青白い炎をつけ、多くの女性が埋没するやうに溺れ、果は女の諦感あきらめに落ちたはかなさを蹴けるやうにした。傷つき、その傷口から火を噴きながら、あくまで人を愛さうとした執念の根深いものは何であらうか。」

時の首相、池田勇人、映画界のトップスターたちと。
右手前の白地の着物姿が生方たつゑ（1960年ごろ）



とノートに附して、女の愛と誇りと、嫉妬の業の深さを取り憑かれたように歌いあげる。「大悪尉」では、若い女御を恋した老いの哀れと執念を、また「老女」では、才気と美貌を持ちながら、老いて路傍に乞食となり果ても、腐りきれない老いの無惨を詠み込む。たつゑがそれまで磨きあげた技量をもって、人間の業を追究する実験作である。この連作は、前年の雑誌「短歌」の企画した主題制作の第一弾として発表されたものだが、たつゑは既に、歌壇をリードする第一線歌人になっていたのである。

走り続けた人生

たつゑは二十一冊の歌集を持つ。「浅紅」以後、四百〜五百首を収録する歌集を二年ごとに刊行した。多作であり、旺盛なエネルギーにおどろく。しかも夫の誠は、県会議員、沼田町長、初代の国家公安委員の要職を歴任し、その妻としての任を果たしながらの創作活動である。東京と沼田の二つの家を行き来しながらの生活で、過労で不眠症になり、しばしば催眠剤に頼っていたようだ。時折、健康に不安を覚え、とにかく生命のあるうちに歌をまとめておこうと、急かれる思いで歌集を刊行し続けたという。文字通り生命を刻む思いだったのだ。

ほかに、『短歌の作り方百科』『短歌のふるさと』などの短歌入門書十六冊、『急がない人生』『母ありてこそ』などの随筆十一冊、『和泉式部』『額田姫王』『大津皇子』などの評伝十冊があり、歌集を含めると六十冊以上の著書になる。また、新聞や雑誌の歌壇選者のチャーセンターのほしりである「主婦の友短歌教室」の講師など、その活躍は多方面にわたり、全力で疾走し続けた歌人である。

一九七四（昭和四十九）年二月に娘婿の慶三が病死し、一九七八（昭和五十三）年十月には、二年間闘病した夫の誠が死去し、人生の暗い影がたつゑを捉える。

空きてゐるベッドの上に帷子を裁つとき雪のふる悲鳴あり
（慶三の死）

ひっそりと廊を運ばれゆく汝の白布の下
の量低きかな

半眼となりしまぶたを撫でながらのち
熄みゆくを知るてのひらか（夫の死）
脈膊の熄みたるのちも還りこむ脈ま
ちてゐてはかなし吾は

きりきりと生命に切りこむようにして自己を問い詰めて歌ってきたたつゑが、二人の死を深く嘆き、悲傷の思いをにじませる挽歌である。一九八六（昭和六十）年に病に倒れ、長い闘病の末に、二〇〇〇（平成十二）年一月十八日、沼田市の病院で死去。九十五歳であった。「休息はない。休息のないことは新しい道を歩む文学者に、神が与へ給ふた宿命である。」（『春禱』の後書きより）と、ただ前進することをのみ考え、自分の「生」の解明を希求し続けた人の、孤独な悲しみの声が、冬風に鳴る裸木の間から今も聞こえてくるようだ。

（さわぐち・ふみ「滄」）